

# 語り下ろし 市民活動

(46)

## アート、それは生きる実感の共有 ①

アート・サポートセンター神戸代表



① 林晶彦 (1955)

兵庫県西宮市出身のピアニスト。89年にデビュー。翌年、ジャガールの絵画から靈感を受け作曲した『ジャガール賛歌』を各地で演奏。95年、阪神・淡路大震災被災。

99年、『林晶彦作品展記念コンサート』を開催。最近 は女優の竹下景子さんの「朗読とピアノ即興演奏」も毎年行っている。

② 松方ホール

神戸新聞社初代社長・松方幸次郎の名を冠した706席の多機能ホール。96年7月オープン。JR神戸駅近くのハーバランド内に位置する神戸新聞社社屋の4-6階を占めている。

③ 新神戸オリエンタル劇場

JR新神戸駅前に位置する複合商業施設、神戸オリエンタルシティ内に88年オープンした639席の多機能ホール。



神戸をアートの力でもっと面白いまちに、もっと生き生きとした交流のあるまちに。「海天堂ギヤラリー」に創まり「ギヤラリー島田」と続く、足掛け31年間の画廊経営者。そして市民発文化芸術支援組織「アート・サポートセンター神戸」の企て人。島田誠さんはそんなふたつの顔を持っている。

北野町にほど近い島田さんのギヤラリーは、アーティストたちの燃える思いを社会とむすび、多くの人たちの出逢いを紡ぐ場だ。いや、ギヤラリーだけにとどまらず、島田さんの舞台は、神戸のまち至るところにあるといつていい。

(聞き手・執筆 編集委員 村岡正司)

撮影：杉浦 健、取材場所：サロンド・ルーサロメ (神戸市中央区)

■市民主導で運営する、「1・17メモリアルコンサート 竹下景子さん 詩の朗読と音楽の夕べ」も、はや15年目ですね。

いやいや、最初から私が関わってたわけではないんです。現在までずっと実行委員会の代表をつとめる田平純吉さんという人が「復興支援コンサート」という名のもとに始めたもので。竹下景子さんも途中からですわ。竹下さんは今回が12回目。コンサートそのものは今回が16回目。第1回は震災の年の6月でした。もともと田平さんが関西西宮信用金庫の当時の理事長と親しくして関係で、関信の社会貢献事業「かんしんコンサート」の企画運営をやっていた。三ノ宮駅に近い本店内にあった「かんしんホール」を会場にしてね。そんな経緯で、被災した市民のこころを癒し、神戸のまちの文化再生をめざした復興支援コンサートを、かんしんコンサートの二環としてすぐに再開できたわけです。林晶彦さんや、お兄さんの林正彦さんな

ど、いろいろな被災音楽家が参加してましたね。

ほんで、最初のころはね。その収益を「アート・エイド（神戸）」に寄付するから来てくれ、という話をもらったので私が参加し始めた。だから当時は観客側。だけでもそうねえ、そのころは、もう竹下景子さん出てましたわ。

ところが途中で関西西宮信用金庫がつぶれてね。もう「かんしんコンサート」という冠付きではできない、それで新しい場所探しも含めて、「島田さん手伝うて」ということで、田平さんから私に相談が来た。聴くほうからやるほうへ移ったわけです。それで松方ホールや新神戸オリエンタル劇場などを紹介してね。県が囁ましてくれというてきた年もあったので、兵庫県の公館なども使いました。最近はずっと大きなホールでやるイメージですが、かんしんホールのときは、ホール自体も小規模で、本当に手作りつていう感じのコンサートでしたね。

■内容はほんとうに素晴らしいものですが、続けていくのは大変でしょう。

06年の第8回まではね。私は手伝つてはいたけど、中心的な主催者では

なくて、いわばサブスタッフ。私個人の人脈を生かした集客やとか、あるいは演奏家を紹介するとかだけの存在でした。

そうそう、実は10周年のときね。10年を区切りにそろそろやめよか、と田平さんから話が出たんです。ところがその年の打ち上げの席でね、竹下さんは「何があつてもこの日は神戸に行くようにしていますから、コンサートがある限り私は協力したい」と、自分の思いを伝えてきた。11年目以降も続けていく意思を田平さんに問うたわけですね。10周年がひとつの区切りみたいに田平さんが思っているようだと、林晶彦さんから竹下さんに伝わっていたこともあつて、竹下さんはそういう話を切り出してきたんでしょ。

以前も今もそうですが、竹下さんは舞台や映画やテレビばかりではなくて、環境問題や介護へのボランティア等、多方面に活躍してるでしょう。年中過密スケジュールで、毎年1月17日を空けることは女優として相当の負担になっているようだと、田平さんは打ち合わせのたびに感じていたんですね。何せ、大女優にボランティアしてもらってる訳ですから。でもせっかく竹下さんがそういうふう意欲持つて、やりたい、と思ってくれてるの

に、地元の市民側がギブアップ出来ない、と逆に竹下さんから勇気をもらった。いや、実にね、竹下さんの朗読は、その詩の魂になりきったようで、まっすぐ心に届いてくるんですよ。ことばに「いのち」が宿っているみたいに。

で、そのころ、ちょうど私が「夜会・ぼたんの会」をスタートさせたので、田平さんに「ぼたんの会」でやらへんか、と声をかけたんです。それやらたらチケットも手分けして売れるし。田平さんが個人でいくら売つても限界があるからね。それに、少しは安くしてくれるというても、松方ホールの賃料もなかなか高いし、相当チケット売らないとペイしない。スポンサー見つけてくるのも大変やしね。

それで、これまで田平さんがやってきた「震災復興支援コンサート」の実行委員会に加え、「ぼたんの会」の実行委員会が共催する。いや、どちらかというと、ほとんどぼたんの会主導ですけどね。そういう方向に持っていった。で、スポンサーも私のルートで、シスメックスさんにね、メインのスポンサーになつてもらったわけですよ。それに「夜会・ぼたんの会」と同じやり方で、2500円の前売チケットの売上の半分を市民団体が活動資金に取れるという形にして。シスメックス

④夜会・ぼたんの会  
主催団体である「ぼたんの会実行委員会」の構成団体がチケットを販売し、売上の40〜50%を努力に応じて各団体へ還元するMSI事業 (mutual supporting institution) 方式を採用したパーティーイベント。

04〜09年の各年5月、神戸市中央区の北野ガーデンを会場に開催された。会の名称には、寒気に強く5月に花を咲かせる植物の「ぼたん」と離れたものを繋ぎ合わせる「bottlen」との双方の意味を込めている。

⑤シスメックス  
シスメックス株式会社。神戸市中央区脇浜海岸通に本社を置く医療機器メーカー。68年創業。

さんからは向こう5年間、毎回50万ずつ寄付してもらおうことになったんですね。今はそれに加えてあと4社ほどから協賛いただいているので、ホールの賃料などをまかなえるようになっていきます。

■これらのイベントを持続させていくコツ。それには本業の画廊経営もヒントになっているわけですか。

そうねえ。別にそれぞれを区別しているわけではない、いつでも「公私混同」で進めているんですよ、私の場合は。商売はもちろんですが、市民活動でも資金力は必要でしょう。いつまでも手弁当、というわけにはいかない。どんなに活動が生き生きしていても、自発性にあふれていても、そこに経済性がなければ、続けられない。ペイさせていくしくみづくりが必要になってくるわけやね。

震災のときの体験で言うよね。震災直後、いわゆる「自粛」ムードが蔓延したときがあった、被災地を中心に「歌舞音曲」のたぐいは鳴りをひそめて、美術館や公会堂や図書館も休館になってしまったりで、一時は公共的空間が「文化閉塞状態」と

化してたわけです。そんな中で、アーティストたちの一部も体制に迎合して沈黙してしまうなど、自己規制がみられたのが残念で仕方なかったねえ。施設が避難所になったり、職員が被災したりと、やむをえない事情があったことも確かやけど。でもこんなときにこそアーティストの使命が問われるわけでしょう。大きなダメージを受けて打ちのめされている人びとの心を癒し、勇気づける。それがアートの力ですから。

私たちが震災の翌月に起こした運動、「アート・エイド・神戸」は、この閉塞した現状を打ち破りたい、という思いを具現化したものです。被災した詩人や画家や音楽家たちが呼びかけ人になってね。実行委員長は

⑥伊勢田史郎さん。ほんで、私が事務局長。「エイド(AID)」には「援助する」という意味がありますが、アートの力で神戸を復興していこう。また活動を通じてアーティスト自身も社会と関わり活力をもらおう。そんな両方の願いを込めてね。まさに、被災地から始まった、被災者自身による、被災者のための活動でした。

■思うように運転資金は集まってきましたか。

とにかく始めよう、走りながら考えよう、ということでのスタートでした。手始めに国内外、109人のアーティストによるチャリティ美術展を開いたら、売り上げ約500万円

⑥伊勢田史郎(1929) 神戸市生まれの詩人。当時、神戸芸術文化会議の議長であった。現在は顧問。

⑦23メートルにおよぶ壁画 奈良からのボランテイア、谷口勇氏によって制作された。

⑧朝日ホール 神戸市中央区浪花町の旧居留地に位置する神戸朝日ビルディング内に94年オープンした505席の多機能ホール。現在は休館中。

### 島田さんおすすめ神戸の本 その1



カラー版 神戸  
— 震災をこえてきた街ガイド —  
島田 誠、森栗 茂一 岩波ジュニア新書  
定価 1,029 円 (本体 980 円 + 税 5%)  
2004 年 11 月

大震災から10年、モダニズムと庶民の街はいま、どうなっているのだろうか。繁栄のはじまりの地、文明開化の窓口、変貌した商店街。はなやかな歴史と痛切な記憶が、光と影となってたどる。復興へ力をあわせる人、アートにける若者、震災体験を伝えようとする人たちの姿もまじえ、神戸を歩き、学ぶためのガイドブック。



が集まった。それを寄付してもらって「芸術関係者緊急支援制度」の基金をこしらえた。すなわち、被災してアトリエ、稽古場、あるいは楽器を失ったアーティストたちに対し、1人10万円の見舞金を贈るというものです。初回の対象者は30人。その後、2年間にわたり3回の募集で82人、合計730万円を贈りました。一応、10年以上のキャリアを持っていること、経歴や被害状況を確認できる人がいること、1年以内に活動を再開できることなどを条件にしたんやけどね。でも難しい審査は抜き。私はいつも大体性善説で考える性質<sup>たち</sup>だから。

また、震災で犠牲になった画家、津高和<sup>つたかわい</sup>さんの追悼展や、文学部門では、155人の現代詩人たちによる『詩集 阪神大震災』などの刊行。これらは大きな反響を呼びましたね。さらに当時、まちのあちこちにできていた何の風情もない建築<sup>7</sup>の板囲いにペインティングを施して、被災した市民の心を癒す壁画作りなんかもやったなあ。これは全国から30人以上の画家の応募が届いてね。海をモチーフにした三ノ宮駅構内の23メートルにおよぶ壁画など、プロの画家たちが何日も泊まりこんで手弁当で制作してくれました。そうして完成し

た作品は圧巻で、無機質な街角にどれだけ潤いを与えたか、はかり知れないものがありましたね。

現在の「アート・サポートセンター神戸」に引き継がれるまで、「アート・エイド・神戸」が7年間に集めたお金は約8千万円です。コンサートなどのチャリティイベントに加え、出版物などの事業収入、それに個人や企業からの寄付を合わせた額です。

それにあの頃、市民レベルによる文化復興機運は実に目覚ましいものがあったねえ。復興対策に追われて行政の文化施策が停滞してしまつてたなか、民営の新神戸オリエンタル劇場や朝日ホールなどは会場を無料提供してくれてたんです。私たちが朝日ホールで8回やったけどね、きわめて密度の濃いコンサートになっていった。受け手である聴衆も、ボランティア出演したアーティストも、被災者同士の痛みを分かち合う、そんな体験を通して、今までにない、緊密な関係が次々と生まれたわけです。アートを通じて生きている実感を共有する、というのかな。そういうふうにして社会とつながることとで、アーティストたちの創作活動も微妙に変化していくんですね。私はいつもそれを目の当たり<sup>ま</sup>にしました。

(続く)

## PROFILE

しまだ まこと  
**島田 誠**

1942年神戸市生まれ。神戸大学経営学部卒業。三菱重工業勤務を経て、神戸元町商店街の「海文堂書店」社長に就任。79年、店内の社長室をリニューアルしたスペースに「海文堂ギャラリー」を創設。00年よりギャラリーを北野へ移し、ハンター坂に「ギャラリー島田」を創設。「アート・サポートセンター神戸」代表。